

文
スーエレン・グリーリー
写真
デイヴィッド・ライル

雪深いアルプスに抱かれた、手つかずの結氷湖は、芸術家サイモン・ベックにとって理想的な、まっさらなキャンバスだ。雄大な山々に囲まれて、彼は大地に巨大なアート作品をつくり上げる。製図、地図製作、そしてオリエンテーリングの素養と、芸術家としての非凡な創造力が融合した優美な仕上がりは、比類なき技術と持久力の結晶だ。

雪に魅せられて

一面に広がる未踏の雪原には抗いがたい魅力がある。子どもたちはそこに飛び込んでスノーエンジェルをつくり、犬は喜び勇んで跳ね回り、スキーヤーは胸を高鳴らせるが、芸術家はというと、誰もが心を動かされてイーゼルを立てるわけではない。例えばサイモン・ベックの場合は、スノーシューに手を伸ばす。

65歳になる元地図製作者のこのイギリス人は、これまでに約400点の巨大な雪の芸術作品を制作している。そのうち少なくとも61点は、フランスのアルプス・サヴォア地方レ・ザルクにある彼の家にほど近い、マルルー湖の凍った湖面で制作されている。美

術評論家なら、ベックの作品を評するにあたり、その規模の大きさや反復模様の使用、本質的な儚さといった共通点にはすぐに気づくだろう。しかし、そこに費やされた膨大な肉体的労力は、容易に理解できないのではないだろうか。ベックは、一定の速足で雪上を何千歩も歩いて、綿密に測定したパターンを輪郭を描き、その内側を埋めていく。彼が「パフォーマンス」と呼ぶ制作工程の一部だ。

ベックはそれから何時間もかけて、時には夜通し、さらに次の日まで休みなく作業に没頭するが、作品は、上手くいけば数枚のよい写真だけ残して、跡形もなく消えてしまう。「儚く消えてなくなる作品でなければ、同じ場所を再び使うことはできません。だから写真に残せないと、本当にながかりしてしまいます。作品が全くの無駄になってしまいますからね」と、ベックは言う。



体と血色のよい顔は、彼が高地の太陽と風と雪を満喫してきたことを物語っている。その後、オックスフォード大学でエンジニアリング・サイエンスを学び、地図製作の仕事に就いた彼は、自身の若い頃の情熱を共有する人々のために、オリエンテーリング用の地図を作成していた。

「雪に絵を描くには、地図製作と逆の技術が必要なのです。紙の上に地表を再現するのではなく、紙に描いた図形を地上に再現するわけですからね」とベックは説明する。彼の作品は、幾何学的なデザインをモチーフにしたものが多いが、あえてフラクタルな（部分と全体が同じ形となる、自己相似性を示す構造をした）描画から離れることもある。水晶、シダ、松ぼっくり、種子、雪片など、自然界に見られる単純な形の繰り返しによる複雑な造形は、子どもの頃に描いた落書きとあまり変わらない、と彼は話す。

しかし、本誌のためにベックがマルルー湖で制作したカラトラバ十字は、これまでのどの作品とも違う。「実際に計測はさほど必要なく、アウトラインを印刷し、測定し、じっくり考えながら作業を進めました。少しの誤差でも目立ってしまいますから」。

芸術家サイモン・ベックは今回、本誌のため特別に、アルプスのマルルー湖の凍結した湖面の積もった雪の上にカラトラバ十字を描いた。当ページの写真には、彼がスノーシューとコンパスと紙の図面だけで図案を「描き」、それをパターンで埋めていく様子が写し出されている。一方、18～19ページと21～23ページに掲載の写真は、完成した作品を上空や周囲の山々からとらえたもの。作品を鑑賞できるのは、それが形をとどめている間だけだ。

氷点下で7時間以上、2万5000歩を費やして仕上げた、対角140メートルになる精度の高い本作は、比較的小さな方で、通常は完成までにより長い時間を要する。

ベックはまず、プリズムコンパスを手で「キャンパス」を測定する。プリズムを使って方角や経緯地点、移動方向を測るこのタイプのコンパスは、土地測量によく用いられる。測定が終わると、頭に浮かんだイメージを紙に描く。そして次の段階で線を描いていくのだが、その際にはロープと、目印として雪の上に落とす衣類以外道具らしいものは何も使わない。フラクタルの境界線はこうして描かれる。続いて「シェーディング」という、スノーシューで足跡を付けながら線の内側を埋めていく作業を行う。これを何度も何度も繰り返す。図柄の一部分と、その隣り合わせの部分を異なるテクスチャに仕上げていく。

傍目には、エキセントリックなイギリス人の奇行と映るかもしれない。ベックは、愛聴するクラシック音楽を口ずさみながら、時に高地の薄い空気に息を切り、独り言をつぶやいたりしつつ、ひとりで忙しく前へ後ろへと動き、雪を踏みしめていく。人がどう思うかなど気にしない。





「報酬を得て仕事をする以上、妥協しなければならぬことは多い。あのシステイーナ礼拝堂が傑作となり得たのは、ミケランジェロは、ほとんど妥協する必要がなかったからなんです。他人に合わせる必要なんてなかったんですね、彼は」。ベックは「自分の才能をミケランジェロのそれに重ね合わせるわけではない。私はレザルクで芸術のための芸術を実践しています。この種の芸術としては世界最高のものです」。彼は、自身の特殊な芸術スタイルを率直に分析しているだけだ。

「20年前、絵を描き始めたのは20年前、大好きな山でできるだけ多くの時間を過ごすため、レザルクに家を購入してからのことだ。「この未踏の雪を見直してみよう、と思いついたのがきっかけでした。シンブルな星の絵を描いて、次の日、チェアリフトから眺めたら、これがい感じだったんです」。

「よい状態をとってもよい状態にするには、もうひと頑張りする覚悟が必要です。とてもよい状態を完璧な状態にするには、より多くの時間を費やさなければなりません」

勢を貫いてきたからです」と、彼は言う。「よい状態をとってもよい状態にするには、もうひと頑張りする覚悟が必要です。とてもよい状態を完璧な状態にするには、より多くの時間を費やさなければなりません」。

「今や彼の作品は称賛を集め、日本、カナダ、南米、そして中国から、雪に描く作品の依頼が来ている。彼は砂浜でも創作活動を行っており、これまでイングランド南部の海辺で180以上の作品を完成させている。雪の作品と同じ原理を応用して、スノーシューの代わりに熊手を使ってデザインを描き、陰影をつける。砂浜での作業は、雪原と違って時間と潮の干満に追われる。砂の上ではより迅速に作業を進めなければならぬのだ。

ベックは今、人生のこの時点で自分がいる場所に誇りと喜びを感じているようだ。自身の芸術にこだわり、自分が満足いくような形で、培ってきた技術と遊びを結びつけ、その作品は高く評価されている。「そこに凍った広い湖があり、よい作品をつくる条件が整えば、私はいつでも楽しめます。死ぬまでやめません。今、人生で初めて、自分の活動に対する評価を実感できています」。